

猫又と六畳一間

茜咲 桜狐

曇天、雨模様、昼下がり。

連日雨が降りしきり木々の枝葉を湿らす頃。

一軒家とアパート、マンションの入り混じった住宅街の一角。「拾ってください」と書かれたボードが掛けられた、小さな段ボールが道の端に置かれていた。

雨除けのフードを目深に被った青年が、その段ボールの前で足を止めた。

その時、段ボールの中から何かが顔を出すと同時に、声を発した。

「お主、我を拾ってくれぬか？」

その声の主は、紛れもなくその段ボールからたたった今顔を出した、黒い毛並みに黄金色の大きな瞳を持つ、猫だった。それを青年は立ったまま、黙って見つめている。

「我はいわゆる、『猫又』というものじゃ」

頭に当たった雨の雫を、頭をふる。ふると振って払いながら、猫又は彼に向かって話す。

「俺に拾ってほしいって、言ったのか……？」

青年はしやがみ込んで、恐る恐る猫又に話しかける。

「そうじゃ、我は今行き場に困っておってな、住まわせてほしいというわけじゃ」

猫又はうんうんとうなずきながら語る。

青年は顎に手を当てて少し考えたのち、

「……そうだな、うちは一人暮らしだし、いいよ。付いてきな」

と答えた。猫又はそれを聞くとすくさま、

「おお、重畳、重畳！ それではこれから世話になるぞ」

と言って、ひよいつと段ボールを飛び出して青年の後ろについてた。

「寒くないか？ 俺のコートの中に入れてもいいぞ」

歩き出す前に、青年が猫又に問いかける。

猫又はそれにならずいて、服の中にもぐりこんだ。

十分ほど歩くと青年の家についた。アパートの二階、階段を上がつて二つ目の部屋が彼の部屋だった。

扉を開けるとキッチンがあり、その奥に六畳のワンルームがある。

「んー、とりあえずあとで飲み皿とか用意するから、その辺にいてくれ」

それを聞いて、猫又は青年の服の中から飛び降りてゆっくり部屋の中を歩き回った。

青年はあつたもので猫の座るシートや飲み皿を用意した。

*

私はカネトラ。もともとは普通の猫であつたが、猫又となつてかれこれ二百年ほど生きている。前の主との生活に満足し

「我は、新たな主に見つけてもらおうべく、いつものように住宅街の路地の段ボールのなかで丸まって寝ていた。」

「そしてある日、私を拾った青年がいた。彼の家はあまりきれいと見え、部屋の中は雑多にモノが散らかっていて、ベッドの端には乱雑に服が積まれている。部屋の真ん中にある小さな丸いローテーブルには食べた後のカップラーメンや弁当の空箱が適当に重ねられている。」

「そのあたりを歩いていてよいとのことなので、部屋の中を歩き回る。足の踏み場は確保されていて、歩き回る分には特に支障はない。」

「そうじゃ、お主。名は何という」
部屋の中をぐるぐる歩き回りながら、青年に問う。

「俺はソウ。草冠に倉と書いて蒼^{ソウ}。お前も名前はあるのか？」
青年は雨に濡れたパーカーを洗濯機に放り込みながら私に聞き返してくる。

「我はカネトラ。兼ねるに虎と書いて兼虎^{カネトラ}だ」

「あははつ黒毛なのに『虎』なのか」
青年は思わず噴き出したように笑っている。

「我の最初の飼い主がそう名付けたのだ。『虎のように大きくなれ』などと言っておったなあ」

「いい名前だな。まあ実際は……うん」

「なんだ、その目線は。我は見た目は小さくともこうして人

語を話せるまでに成長したのだぞ」

「よしよし、がんばったんだなあ」

「そう言いながらソウはしゃがみ、私の頭を撫でつける。」

それから数日後、土曜日。ソウは休日らしく、昼近くまでゆつくり寝ていた。太陽が南中に近づくころ、ようやく彼はそのそと起きだしてきた。彼が起きて少し経ったころ、ピンポンと部屋のインターホンが鳴った。

ソウは小窓から外を確認すると、扉を開けた。そこには髪を両サイドで結った娘が立っていて、ソウはその娘を家の中に招き入れた。

「ごめんね、ソウくん、急に来たいって言って」

「いいよ、ユウナならいつ来ても家開けるから」

「ありがとう、と言いながらユウナという娘は部屋のベッドに腰掛ける。」

「あ、猫だ。どうしたのこの子？」

「彼女は部屋の隅にいた私に気づくと、こちらに近づいて撫でてきた。」

「この前、帰り道で拾ったんだよ。かわいいよね」
ソウが飲み物を注いだコップと私用の水皿を持って戻ってきた。

その後、何時間か二人は駄弁ったり、漫画を読んだりしていた。私はその間、部屋の中を歩き回ったり、ちびちび水を飲んだりしていた。

地平線に薄く茜色が掛かり始めたころ。

「……きょう、えつち、してくれない……？」

会話が少し止んだタイミングで、ユウナがソウに寄りかかり、小さな声で問う。

「……いいよ、おいで」

ソウは腰掛けていたベッドの上に座り、服を脱ぎだす。そしてユウナもゆつくりと服を脱ぎだす。

全て脱ぐと、ユウナは黙ったままソウに抱きついて、そのまましばらくじつとしていて、それからセックスをしていた。

二人はシャワーを浴びて、夕飯を食べ、しばらくまたテレビを見たりおしゃべりした。その晩はユウナはそのまま泊っていた。そうして朝になると、ユウナは自分の家に帰った。

私の分のごはんを皿に盛って貰って、ソウと共に朝ごはんを食べる。

「そうじゃ、昨日来ておった娘は、お主の恋人か？」

キヤットフードを食べながら、ふと気になったので聞いてみる。

「んー、そうだな……あいつは恋人じゃなくてセフレだよ……

……あー、セックスフレンドつてやつ」

「ほう、そのような関係なのか。聞いたことはあったが実際に

出会ったことはなかったのう」

少しごはんを食べてから、

「それで、あの娘とはどれくらい付き合いなのかな」

「あいつと出会ったのは大体一年前、大学一年生のときだよ。他学科のやつなんだけど、知り合ってちよつと経ってからセフレになった。」

そうしてユウナという娘とソウについて、しばらく話を聞いていた。

あの娘がこの家に来たいというときは、大抵寂しくなった時点で、その寂しさを満たしたくてセックスしたいと言ってくるのだという。

それから何日か経って、再びユウナがソウの家を訪ねてき

た。しかし今日はソウは外出をしている。あらかじめ合鍵を受け取っていたのか、そのまま部屋の中に入ってきた。この前と同じくユウナはベッドの端に腰掛け、しばらくスマホを見ていたり、ベッドに横になつたりしていた。

横になりながら、ユウナはぼつりと独り言をつぶやいていた。

「あたし、これから先どうしたいんだろうな……。このまま、いろんなこと曖昧なままにして、諦めてくのかなあ」

「お主は、寂しい時や誰かに会いたいとき、どのようなことをしておるのじゃ？」

「……え？ だれ……？」

ユウナは跳ぶように起き上がって、部屋の中を見渡す。

「我じやよ、猫じや」

私はそう言いながら彼女の前でこの身体を主張する。

「我は猫又。人語を話せる猫じや」

「へえ〜……猫ちゃん、しゃべれたんだ……」

彼女はしばらく呆気にとられたようにぼかーんとしたあと、私をいろんな角度から見まわす。

「ほんとに猫ちゃんだあ……」

「そうじや、我が話しておるのじや。それで、お主は寂しいときどうしておるのじや」

私の問いに対してユウナは、少しうなづいて考え込んでいた。

「えっち、してる。それがいちばん、頭の中すつきりして、ほかのことなんかどうでもよくなるから」

クツシヨンを抱きかかえて、考えながら、一つ一つ言葉にしていくユウナ。

「ソウくんは、私が急に押しかけても、何も言わずに迎え入れてくれる。でも、大学卒業とかで、いつかこの関係のままでいられなくなっちゃう。そしたらどうしたらいいのかわかんなくて」

「我は、何度も、何度も別れと出会いを繰り返してきた。そのたびに、寂しさに包まれる。一旦寂しさが紛れても、またすぐにそれが押し寄せてくる。その寂しさを埋めてくれるのは、実は身近なものだったりするのじや。それは、何気ない会話だったり、あいさつしてもらったり、お主のいう『えっち』もそうじや、誰かと『つながっている』という感覚が寂しさを埋

めてくれるのじや」

「じゃあ、猫ちゃんは、寂しい時どうやってそれを埋めてたの？」

「我は、むかし我をかわいがってくれたご主人の言葉を思い出したり、散歩しているとき声をかけてくれる人になーと鳴いたり、こうしてたまに話してくれる人間との会話を楽しんだりじやな」

「なるほどなあ……つながってる感覚かあ。じゃあ、ソウくんとお話したり、テレビ見たりするのも……言われてみれば、寂しくなくて楽しい時間だなあ。そっか、他の人とも、こういうことしてるときは寂しくないもんね、これを繰り返していけばいいんだ」

そう言うと、おもむろにユウナは立ち上がる。

「ありがとう、猫ちゃん！」

なにかすつきりしたのか、軽い足取りで部屋を出ていた。

しばらくして、用事を終えたソウが部屋に帰ってきた。

「なんか、ユウナがお前と話してすつきりしたみたいなのをメッセージで送ってきたんだけど、どんな話してたんだ？」

「特段面白い話をしたわけじゃないが……まあ、退屈しのぎに付き合っただけじやよ」

「……そうか、別にそれならいいけど」

「いいのか？ その割には随分と膨れた顔をしているように見えるが」

ソウの顔は、普段に比べてなんとなく不機嫌そうな表情を浮かべている。

「お主、さてはあの娘に会えないこと、ちよつと『寂しい』と思つておるじやろ。たまにはお主の方から声をかけてみたらどうじや？」